

Meijo FD NEWS

Meijo FD NEWS

Meijo University Faculty Development News

Vol.6

2007.3

学生のみなさんにお答えします！

◆ 第8回FD講演会～学部FDからの出発～

◆ 学生による授業満足度アンケート 調査結果速報に対する学科長コメント

学生 のみなさんへ お答えします!

アンケートで寄せられた学生のみなさんの声に対し、
学部長・学科長から教育向上の取組みにつき、
お答えいただいております。

今回のFD NEWSでは、2部に分けて、
内容をみなさんにお知らせ致します。

第1部

2006年11月6日のFD講演会で、各学部の取組みにつき、学部長より講演いただきました。

講演会では、更に、他学部の取組みを参考に、
学部毎に今後の取組みを議論し、結果について、
再度、学部長より講演いただきました。

第2部

2006年6月、「学生による授業満足度アンケート」
に対し、各学科長より感想、意見、今後の取組み
などにつき、コメントをいただきました。



教育向上に対する 名城大学各学部等の 組織的取組み

第8回FD講演会 ～学部FDからの出発～

日時：2006年11月6日（月） 13:00～18:30

場所：名城大学天白キャンパス 共通講義棟北1階 名城ホール

主な 内容

- 第1部：基調講演「各学部の現状の取組みについて」…各学部長より学部のFD活動取組み状況につき説明及び質疑応答
- 第2部：各学部討論（今後の取組みにつきディスカッション）…学部ごとに、基調講演での他学部の取組みを参考に、今後の活動展開について議論
- 第3部：討論結果発表「今後の取組みについて」……討論の結果を今後の取組みとして各学部長より発表。質疑応答

FD講演会 チーム座長 挨拶

■ 名城大学FD委員会講演会グループ

道山弘康（農学部）・井内尚樹（経済学部）・塩崎万里（人間学部）・張昇平（都市情報学部）・岡本政之（都市情報学部）・水野容子（キャリアセンター）

名城大学教職員にとってのFD活動の印象は、それが「学生による授業評価」から始まったことによって決定づけられてきました。しかし、FD活動の目標は「学生が積極的に学習してその効果を上げる」ことです。そのためには個々の学生のモチベーションを高めることが重要ですが、これまでに取り組んできた「個々の教員の教育能力向上」に加えて「適切な履修計画の指導」が行われると、目標に到達しやすくなります。すなわち、「学科教員が学科カリキュラムの構造・各授業の位置づけを理解し、ゴール設定を明確化し、学科教員相互間の理解と連携を構築する」という組織的な取組みが必要になってきます。このように、FD活動においては「学部または学科による組織的な取組み」が重要な位置を占めています。講演会の開催によってその機運を醸成することが、私たち講演会グループに与えられた仕事と考えております。

そこで、第5回講演会までは個々の教員の授業のスキルアップに参考となる課題で開催してきましたが、第6回講演会からは組織的な取組みについても課題として扱うことにしました。そういう中で「学部によってFD活動に対する温度差がある」「同じ名城大学教員なのに、隣の学部で何をやっているか全く知らない」ということが強く意識されるようになってきました。講演会参加者数が学部によって大きく異なることも、FD活動に対する学部間の温度差の表れと考えられます。今回の第8回講演会は「教育向上に対する名城大学各学部等の組織的取組み」を聞くことによって、お隣の学部では何をやっているのかをお互いに知り合い、「隣の良いものをとり入れる」ことになれば、名城大学のFD活動がさらに発展すると思えました。

本講演会は、第1部として各学部長に「教育向上に対する学部の組織的取組み」について具体的にお話しいただいた後、第2部で学部別に「今後の取組み」について議論し、最後に第3部でその意見集約を発表するという形式で行われました。講演を快諾していただいた各学部長、そしてご多忙中にもかかわらずご出席していただき熱心に討論に加わっていただいた学長、理事長をはじめとする皆様のご協力に感謝する次第です。

以下に、各学部におけるFDの取組みの現状と今後の取組みについて、講演会で学部長から話された内容を、学部間比較ができるように表にとりまとめました。また、講演会で発言された質問および意見には、今後のFD活動の参考になるものが多く含まれていることから、これらを記録しました。最後に、学長、FD委員長およびFD副委員長による本講演会の講評を載せて、第8回FD講演会のまとめといたします。

FD講演会まとめ

第1部

「現状の取組み」

	学生アンケートに対する感想		
		学部のFD推進体制	教員支援・育成プログラム
法学部	1.学生アンケート結果について ●学生の教員評価は一昔前では考えられなかったことだが、現在では第三者評価もあり、教育上必要と認められる。		1.新人教員 ●面接・採用時、教育に対する抱負・手法をヒアリング。 2.現教員 ●講演会・FD委員会の内容を報告している。
経営学部	1.学生アンケート結果について ●「授業の準備をしっかりとできていると感じる先生」、「簡単に単位が取ればよい」の質問事項に対する回答結果は、学生と教員との認識のギャップが大きい。	1.「教育制度改革委員会」の設置 ●ビジョン策定、制度改革、カリキュラム等、委員会を設置し検討中。	1.教科書の作成 ●共通の教科書作成を通じ、教員の教育技術向上を図っている。
経済学部	1.学生アンケート結果について ●「この学部学科に入学して良かった」の割合が62.7%と低く、学部の向上努力が求められている。 ●「全専門科目中ほとんど理解できない科目」の割合が50%以上と高く、反省すべき材料となっている。		
理工学部	全体としてJABEEの取り組みにつき説明 ●P-D-C-Aシステムを前提とした展開。		
農学部	1.学生アンケート結果について ●生物資源学科はやる気不足の学生が相対的に目立つ。 ●応用生物化学科は興味をひく授業が相対的に過少。 2.3学科共通の課題 ●興味をひく授業に向けた改善・工夫。	1.「ランチタイムミーティング」定期開催 ●月2回授業内容の改善策等につき、意見交換実施中。課題は学科会議で正式に取り上げ、実践に移行。 2.学生と教員のコミュニケーション作り ●学生と教員の交流促進に向け顔写真を配布中。	

各学部におけるFDの現状の取組みにつき、学部長から講話いただいた内容を、まとめました。

学部の現状の取組み

学生支援

学習目標の明確化と カリキュラム整備

1.カリキュラム整備

- 伝統的な法分野を、六法に従い段階的な教育カリキュラムとして整備中。

2.学生への趣旨徹底

- 何度も機会を設け、趣旨徹底をはかっている。

学習支援プログラム

1.オリエンテーション合宿の実施

- 学習目標・カリキュラムの周知徹底に向け、入学者対象にオリエンテーション合宿を実施中。

1.「リレー講義」の開催

- 学生に幅広い入門知識を伝授するため「リレー講義」を実施中。

2.専門ゼミの必修化

- 専門ゼミを必修化することで、きめ細かい学生支援を展開中。

学生のモチベーション向上策

1.「ゼミナール協議会」の設置

- 学生の自主運営による「ゼミナール協議会」を設置し、教員が側面支援を図っている。

2.プレゼンテーションコンテスト、 論文コンテストの開催

- 学生の自主性発揮に向け、各種イベントを開催し、学生のモチベーション向上策を展開中。

1.カリキュラム改正の取り組み

- 入学から卒業まで一環した積み上げ方式（ステップ・バイ・ステップ）により、学力が向上するようカリキュラムの改正に着手中。（ex.必要な専門基礎科目・学部基礎科目を体系的に必修化していく）

1.小テスト、レポートの実施

- 講義の理解度促進のため小テスト、レポートを実施中。

2.基礎ゼミの必修化

- 1年を対象とした少人数基礎ゼミの必修化を推進中。

3.e-ラーニングによる学習支援の実施

- HP上での自学自習や講義準備の予習を可能とすべくe-ラーニングを展開中。

1.「ゼミナール協議会」の設置

- 入学時のセミナーやディハイク等を開催し、学生のモチベーション向上策を展開中。

2.基礎ゼミ会議の開催企画

- 基礎ゼミ間のディベート、発表会の開催を企画・検討中。

3.ゼミナールの充実

- 課題に対するレポート提出や小テストの実施。

1.人材育成にむけたカリキュラム の整備

- 専門科目を基礎科目から応用科目へ段階的に配備。
- 1年次から実験実習科目を導入し、卒業研究による完結を目指す。

2.カリキュラムの検証実施

- 開講科目や年間の割り振りにつき検証を実施。

1.実験機器の設備充実

- 実験機器の整備、充実にむけ組織として取り組み中。

1.1年生向け概説開講

- 専門分野をわかり易く説明し、学生のやる気を引き出す。

2.実験を介したコミュニケーションの促進

- 全教員が分担中。

3.「指導教員制度」の実施

- 長年、「指導教員制度」を実施中。（最近充分成果を上げられていない側面もあるが）

4.「フレッシュマンミキサー」の開催

- 学生間または教員と学生の交流を深め、モチベーションの向上を図るためフレッシュマンミキサーを開催中。

FD講演会まとめ

第1部

	学生アンケートに対する感想	学部のFD推進体制	
		学部のFD推進体制	教員支援・育成プログラム
薬学部	1.学生アンケート結果について ●平均勉強時間が週2時間未満の学生が50%以上というのは残念というより驚き。 ●授業間の連携不足を8割の学生が感じており、改善が必要。 ●5～8割の科目を理解していない学生が半分近くいるのは大きな問題。 2.教員としての課題 ●大学教員は研究中心にきており、教育については素人であることを謙虚に受け止めるべき。	1.薬剤師国家試験にむけた全学的取り組み ●化学系、生物系等、系列間の教員連携や科目間調整を図り、低学年からの落ちこぼれを防いでいる。	1.「全国薬学教育者ワークショップ」への参加 ●教育力向上のために教員61名中、約7割が参加中。
都市情報学部	1.学生アンケート結果について ●「新しい事を学べた」、「授業の準備をしっかりとっている教員が多い」の両項目で高評価であった。 ●学習、授業内容については低評価であった。 ●1週間の勉強時間が2時間未満の学生が62%は、低学力の学生が多い中、愕然とする事実。 2.教員としての課題 ●学部で学ぶ目的の明確化と授業方法の改善が急務。 3.その他 ●学力低下が顕著の中、教員努力だけで対応は可能か？	1.高大連携の取り組み ●情報処理教育を対象に高大連携を実施中。	
人間学部	1.学生アンケート結果について ●「4年間の学習の流れが分かる」が38.5%と低く、今後の課題である。 2.教員としての課題 ●科目間の関連性、4年間の学習体系の明確化に向け議論を開始。	1.シラバス改善に向けたワークショップの実施 ●教員がシラバスを持ちより、授業改善に向け意見交換を実施済み。	1.カリキュラム改善 ●学生の学習に配慮した必修科目の緩和と、全体構造の明確化に向けカリキュラムを改正。(H19年度実施予定)

学部の現状の取組み

学生支援

学習目標の明確化と カリキュラム整備

学習支援プログラム

学生のモチベーション向上策

1.「エイジ・ミキシング法」の実施 （「教授錯覚」の認識をベースに）

- 受身の講義だけではなく、人に教える事で教育効果は高まる。上級生が下級生に教えるエイジ・ミキシング法を実施中。

2.小テスト（形成的評価）の実施

- 学習内容の忘却度をミニマイズするため、適宜小テストを実施中。

3.PBL（チュートリアル教育）・ SGD（スモールグループディスカッション） の導入

- （新たな授業形態として）問題解決型の自己学習法を導入実施。

1.公務員養成から民間人材養成 への転換

- 公務員養成の目標を実態に則し、民間人の養成機関に再構築中。

1.共通テキスト・プリントの作成

- 学生レベルを考慮した教育方法の展開。

2.充実した教育スタッフ体制

- TAを含め学生10数人に1人の教育スタッフを配備。

1.1年生を対象とした基礎ゼミの必修化

- 入学時、全学生の基礎ゼミ受講を必修化している。

2.「指導教員制度」の実施

- 入学時の基礎ゼミ教員が4年間学生を指導中。

3.学業不芳学生に対するきめ細かい支援

- 成績不振者に対して学務委員（学部の1/3の教員）が面接の上、きめ細かい指導を実施。

FD講演会まとめ 第3部 「今後の取組み」

	学習目標とカリキュラムの関係	授業に	
		満足度を上げるための授業の考え方	
法学部	導入教育 ●専門への導入教育が重要だと考える。 カリキュラムについて ●学生のニーズ・状況を把握して講義しなければならない。	少人数教育について ●少人数教育を導入する必要があると考える。 ST比率の改善が必要 ●教員規模と学生規模の調整が必要。	
経営学部	オリエンテーションの実施 ●導入教育としてオリエンテーション合宿は重要な役割を果たしている。	授業環境の整備 ●学生意識のアンケート調査やチューター制の導入が必要であると考ええる。	
経済学部	カリキュラムについて ●現在改正中である。 オリエンテーションの実施 ●オリエンテーションでの履修指導を今少し懇切丁寧にすべきである。	満足度向上のための試案 ●学生の疑問、意識を質問表で確認をし、講義中に回答することで復習にかえる。 ●講義でビデオを活用する。 ●講義中の集中力維持に向け、時間配分を考える。(60分集中させ30分柔らかい話をするなど)	
理工学部	JABEEとの関係 ●JABEEでは学習目標とカリキュラムの関係につき、各学科で学生や教員に周知徹底をはかっているが、今後は教員間での認識の共通化、学生への周知徹底並びに伝達方法の統一化に向け更に検討していきたい。(ex. 学生便覧やホームページへの掲載)	学生への対応策 ●学生の基礎学力不足を補う為、習熟度別のクラス・演習を現在検討中である。 ●動機付けがもっとも重要であり、手法につき今	
農学部	「教育目標」での明示 ●学習目標とカリキュラムについては明示されている。 今後の課題 ●科目間の関連性や系列を明示した電子システム作成の要望があった。 ●薬学部のように系列会議を開催し、カリキュラムと学習目標との関係について検討すべき。	満足度向上のための試案 ●驚きと感動を与えるような授業を行い、勉強を好きにさせることが必要である。	

他学部を取組みを参考に「今後の取組み」につき、学部毎に議論した内容を各学部長より発表していただきました。

について	FDについて	
学生に勉強させるにはどうすべきか	FDを推進する為の所属教員の努力	学部独自のFD課題の取組み
きちんと学ばせる授業システム作り ●必修科目の増加や時間割の固定化により、きちんと学ばせる授業システム作りが必要である。(学生離れを促進するとの指摘もあるが)	教員の連携 ●教員同士の授業参観の実施、試験内容の交換など、相互に方法を参考にすることが大切である。	組織の充実 ●FD活動の原点に戻り、学生の立場で部内各委員会の組織化を目指す。
PBLの導入 ●PBLの導入などにより自主的、自発的な勉強に仕向けていく事が必要である。 学生への個別対応策 ●学生を個別フォローするために教員と事務が一体となる必要がある。	組織の連携 ●「教育制度改革委員会」との連携を図り、コース・学科に関するミーティングを充実させる。	
学生への対応策 ●自宅で勉強させるのはなかなか困難な為、授業中に復習させる必要がある。 ●小テスト、中間的なテストの実施や宿題を課している。 教員の活動 ●綿密な出席管理や遅刻の評点反映を考えていく。 ●ゼミの必修化も必要である。	FD活動を活発にするためには ●FD会議的なものを常時設ける事が大事である。 「指導教員制度」の活用 ●基礎ゼミから専門ゼミへ移行する際、学生カードで情報を伝え、学生の勉学・生活情報を一貫してトレースすることで、実質的な「指導教員制度」を目指している。 学生への個別対応策 ●警告制度の徹底(面談等の充実化)を図ろうと考えている。 ●学生の成績を4年までトレースできる体制作りが必要である。 ●教育改善に向けデータベースを構築するため、入試方法別の学力レベルチェック、追跡調査を実施する。	
ラス編成や基礎的な科目に対する少人数後検討していきたい。	JABEEを通じた積極的交流 ●JABEEへの組織的取り組みを行っているが、さらに教員間・学科間の交流を進め、優れた事例の共有化を積極的に図っていかねばならないと考える。	
「指導教員制度」の活用 ●「指導教員制度」を見直し、活性化させることが必要。 学生への個別対応 ●1年次だけでなく2・3年次もフォローしなければならない。 シラバスの活用 ●現行のCD化したシラバスでは全体像の把握が困難。冊子の活用を検討すべき。	フレッシュマンミキサーの実施 ●教員と学生の親睦を図り、学生の思いや感じていることを理解するよう努めている。 ランチタイムミーティングの継続 ●今後も継続し、教員間の意志統一を図ることが必要だと考える。 教員の積極的活動 ●FD活動への参加を通じ、学生のレベルチェックや理解に工夫を凝らすようになってきた。	

	学習目標とカリキュラムの関係	授業に	
		満足度を上げるための授業の考え方	
薬学部	系列会議の活性化 ●系列会議を充実させ、授業内容の実態把握を行い、教科書の統一化・体系化を図る。 学力低下の防止策 ●学生の未履修科目につき、時間外で高校レベルの補講を行う必要がある。（附属高校・予備校・塾の先生の協力をあおぐ）		
都市情報学部	教育内容の再検討 ●公務員志向の教育から民間志向の教育内容への転換をはかる。（実業教育・実務教育の充実） ●1年時から、プレゼミや基礎ゼミを導入していく。	学生との関係強化 ●学力以外の良い所も認め、コミュニケーションを図る（プレゼミなどでコミュニケーション作り）。 少人数教育 ●1年時からの少人数教育を目指す。	
人間学部	新しい学問体系 ●新しい学問体系であり、試行錯誤を繰り返している。	満足度を上げるための試案 ●全員を受け入れるという包容力を示しつつ、学問的な達成感を与えることが重要である。 ●個別授業とともにカリキュラム全体として満足度を高める為の授業が必要。	
センター			

について	FDについて	
学生に勉強させるにはどうすべきか	FDを推進する為の所属教員の努力	学部独自のFD課題の取組み
国家試験対策とモチベーションの向上 ● 国家試験問題を分析し、系列毎に授業の過不足を検討していく。 ● 国家試験に関わらず、卒業にも相応の勉強が必要とし、モチベーションを高めている。(秋卒業の実施) ● 4年生を対象とした国家試験の特別講義Ⅲでは自己学習の習慣付けを目指した形態となっている。	会議の充実に向けた動き ● 系列の中で教員同士が授業内容を把握することが必要であり、教員による授業参観を行うことを検討中である。 教員の積極的活動 ● 教員の意識変化があり、「全国薬学教育者ワークショップ」への積極的参加がみられる。	組織の再構築 ● 責任あるポジションで系全体・学年全体を見る組織作りが必要。 ● 学生の目線で学部教育の推進を図るため「学部教育推進委員会」への学生参加を検討している。 ● 同一年次で系列を超えた科目間の連携が必要である。(学年会議の設置を検討)
学生への対応策 ● 学習のモチベーション維持向上のため、中学レベルからの復習をする必要がある。	組織化を目指したFD活動 ● 現在FD活動に対する組織的な取り組みは行われていないが、授業改善への個人的努力は払われている。 ● 個人的努力・体験を体系化するためには組織的展開が必要であると考える。	
学生への対応策 ● 小テストの実施も効果的であるが、授業の場で真剣に勉強する雰囲気作りが大切である。(ex.講義中のマナーガイドラインの設定) ● 大人数講義の場合、TAまたはSAを活用する必要がある。		
	教員のFDの取り組みについて <大学教育開発センター> ● 業者テストを活用し、学生の到達度を把握した上でカリキュラムをアレンジしたり、学生の授業理解度が上がるよう取り組んでいる。 大学全体のFD活動におけるセンターの役割 <情報センター> ● 大学全体のPC、マルチメディアの機器管理を行い、全学共通教育において情報をリードしている。 <大学教育開発センター> ● 全学共通教育における語学、英語を取りまとめて授業を実施している。 <教職センター> ● 全学の教職課程、学芸員に対する授業実施の責務の他、教員採用試験に向けた対策指導を行っている。 センターは全学において企画・調整の役割をするような専門的集団として、学部の先生やFDの方々と連携していきたい。	

FD講演会の質疑応答時におけるコメント (抜粋)

教育向上に対する名城大学各学部等の組織的取組み 第8回FD講演会～学部FDからの出発～

学習目標の明確化とカリキュラムの整備について

1. 学習目標の明確化

- ・教育目標について、理系では「教育協議会」があり全国統一的な目標が設定されているが、文系ではどうか？
- ・目標とすべき人材を大学の教員が定義するだけでは不十分。世間・社会の基準に合わせるべき。
- ・卒業時に身につける具体的な能力・知識につき、各学科は抽象的ではなく明確に記述すべきである。

2. 学習目標に沿ったカリキュラムの整備

- ・学習教育目標とカリキュラムの関係が学生にとって明確であることが重要。
- ・学習目標到達に向けたカリキュラム、行動様式、会議運営等を策定する際、目標に対する手段としての位置付けを明確化して行うべきである。
- ・カリキュラムのスリム化・適正化に関連し、124単位に対しどの程度のカリキュラムが適正か、合意が必要。
- ・学部の教員構成に配慮したカリキュラムではなく、真に必要な内容で編成して欲しい。教員の過不足については学部間での調整で対応して欲しい。

3. 教育プログラム全般

- ・JABEEの教育プログラムにおける位置付け、教育評価の中での位置付けをどのように考えているか？
- ・導入教育につき、各学部はどのような対応をしているか。



学生のモチベーション対策・支援について

1. 学生の質に配慮したフォロー支援

- ・授業を理解できない学生に対し、試験で合格点を付与するのはおかしいのではないか？ また学生が満足する授業が必ずしもよい授業ではない。
- ・学生の質の急落が顕著という印象を受けている。現状の学生レベルを十分認識した上で授業のあり方を考察すべきである。
- ・成績不振の学生に対し、長期的スパンでの追跡調査はどのような方法があるか？

2. モチベーション対策

- ・学生が出席して授業が初めて意味を持つようになる。文系学部として出席率をどのように考えているか？
- ・卒業留年がある事は勉学上の大きな励みとなるが、その際、学生の授業満足度や講義のわかり易さにも配慮し、先生の1人よがりにならない様にすべきである。



FDの取組みについて

1. 教員評価

- ・FDを展開していく上で教員評価は不可欠である。教員1人1人が目標を達成していくために、評価は大前提となる。

2. FD活動

- ・FDのためのFDは絶対に回避すべきである。FDアンケートを実施するだけで教員や学生が変わらなければアンケート疲れを起こすだけである。

3. FDの充実

- ・FDのみでは不十分で、事務職員対象のSDを実施し、教員・事務職員間の役割分担、意志疎通を図ることが必要である。事務職管理者研修会議にセンター長が出席し、問題意識の共有化を図ることが第一歩ではないか。
- ・FDの充実に向け、学生成績を1年から4年までフォローするデータ整備が不可欠である。職員の中から専門家を養成して欲しい。(尚、キャリアセンターではフォローを2年前から実施中)

FD講演会の総括

教育向上に対する名城大学各学部等の組織的取組み 第8回FD講演会～学部FDからの出発～

兼松学長

- ・大学力は基本的に教育力であるが、JABEEのように世界で通用する「質の保証」が不可欠である。
- ・研究者は従来、教育技法を必ずしも学んできておらず、今後は学ぶ必要がある。授業公開、PBL方式等は各学部で導入を検討してもらいたい。また文系でも理系同様ゼミナール方式を積極的に取り入れて欲しい。また、教員の教育力向上に際しては、第三者評価が必要である。
- ・「驚きと感動」「学問に対する憧れと感動」こそ学生のモチベーションを高める。
- ・授業中に講義内容を全て理解する習慣をつけさせて欲しい。
- ・基礎学力不足は大学にとって重要な課題である。メックまたはレック教育により、基礎学力の向上を図って欲しい。

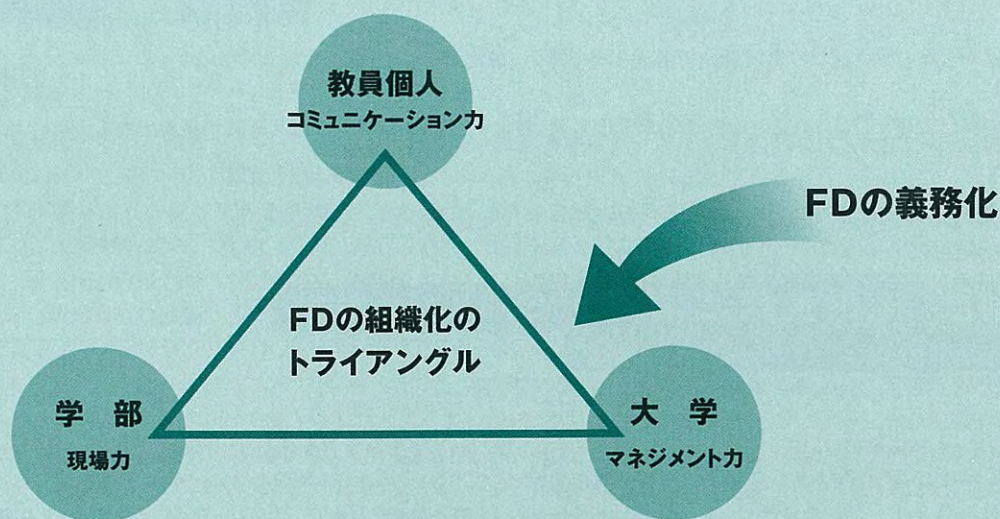


原FD委員長

- ・FDを1つの教育業績として評価認識するシステムを構築すべきである。

池田FD副委員長

- ・FD展開に際しては、「大学の教員」、「学部」、「マネージメント力」の3つのトライアングルがかみ合って初めて効果を発揮する。



学生による授業満足度アンケート 調査結果速報に対する学科長コメント

実施期間：2005年12月19日～2006年1月13日

本学ではFD活動の1つとして教育の向上を目標として授業担当者、学生諸君の協力のもとに授業評価アンケートを実施しております。今回は、学生自身が討論を行いその中で作り上げたアンケート項目により、全学部、学科に対する授業満足度アンケート調査を実施しました。企画の段階より学生が参加したことは本学としては初めての試みでもあります。調査結果の詳細についてはすでに、冊子、掲示などで公表も終えております。今回、発刊のFDニュースでは上記のアンケートに対する、各学科の意見および今後の取組みについて学科長コメントとしていただいたものを掲載しております。

アンケートに協力いただいた学生に対する回答を兼ねております。

FD委員長 原 彰

法学部 法学科

commentator

学科長：野上 博義

◎良好な科目と先生

「10名の専任教員がリストされている。法学科22名そのうち後期開講者分減じても、学科全体としては良好か。」

◎教員満足度

「教員の個性は大事に理解されるべきである。しかし、技術的な面については、改善の余地があろう。」

◎授業

「学生と真摯に向き合う姿勢が必要である。すなわち、学生の理解度に合わせた授業の必要性。板書、話し方については工夫されるべきである。私語、遅刻は大学の姿勢として対応すべきか。出席はとり方の改善が必要である。受講人数は少ない方がより良い。」

◎試験等

「試験、補講、成績評価は学部独自の特性あるものである。」

◎窓口対応

「学生の不満が強い(最重要課題)。教員と各センターとの結びつきが希薄である。」

◎施設

「研究室から鍵の受け渡しの場所経由で講義室まで遠い。講義室のS101等は冷房が効かない。」

◎その他

「学生の声は大事にしなければならないが、教員と事務(特にセンター)の意思疎通と連携が必要である。」

法学部 応用実務法学科

commentator

学科長：柳 勝司

このアンケートの結果について、学科長としてコメントすることには、大きな困難性を感じる。それは、どのような趣旨でアンケートをしようとしたのか、分りにくいためである。アンケートをする際には、学生に、アンケートを行う趣旨やアンケートを取る各項目についての説明を十分に行う必要がある。おそらく、この説明はやっていないと思われる。十分な説明がないと、学生は、良く分からずに、ある意味では無責任に、アンケートに答えている可能性がある。(もっとも、説明のある場合には誘導が可能となり、いずれにしても、アンケートは実行が非常に難しいものであり、アンケートを行う際には、このような困難性を十分理解した上で、慎重に行って欲しい。)こうしたことから、学科長としては、アンケートの結果について、責任をもってコメントをすることはとてもできないので、許していただきたい。

例えば、応用実務法学科に入学してよかったかについて問に、大いに思う19.8%、やや思う52.7%、あまり思わない21.7%、全く思わない5.8%、という数字が示されているが、これについてもコメントのしようがない。入学してよかったと思うという趣旨の数字が72.5%になるから高い数字であり、喜ばしいというようにはとても思えない。どのように理解したらよいのか分からない。

差し障りの無いところで、「今後の改善」に関係して述べておくと、授業後相談しやすい先生についての問(「相談」という表現をしているが、授業の内容に関して、学生が質問をすることなのか、問の内容がよく分からないところがある。)に、かなり多い1.9%、多い14.0%、少ない64.3%、とても少ない19.8%、という数字が示されているが、学生は相談できる先生が少ないと感じているようであるので、もしそうであるならば、各先生に学生の相談に乗るようにお願いはしたいと思う。

経営学部 経営学科

commentator

学科長：谷江 武士

今回の学生による授業満足度調査の結果についてどのように受け止めたか、また受け止めての今後の改善のポイントについてコメントしていこう。

まず、学生の授業評価で、「全授業科目について」見ると、「新しいことを学べた授業」は、学生は多いと答えている。しかし将来実際に役立つ授業、ポイントを示してから話す授業、学生に興味をわくように工夫した進め方の授業は少ない。とりわけ、興味をわくように工夫した授業を行うには難しい点もあるが、学生の勉学の意欲を引き出すために努力する必要があると思う。

このことは、学生の「全授業科目の印象」でも表れているが、内容が魅力的な科目や内容が面白い科目は、いずれも少なく、勉学意欲を引き出すことが求められている。

「先生の印象」では、「授業の準備をしっかりとっている先生」は、比較的多くの学生がそう感じている。しかし一歩進めて、「学生のやる気を引き出す先生」「学生の理解度を確認しながら授業を進める先生」「相談しやすい先生」「先生同士がお互いの授業内容を把握している」教員は少ないと学生は答えている。ここでも勉学意欲を引き出す教員が求められており、きめ細かな指導や勉学の意義をわかりやすく学生に話す必要があると思う。

学生自身が自己分析しているが、「大学に入ってから人間的に成長した学生」や「専門知識が身についた」と思う学生が多い。また「簡単に単位が取ればよいと思う」学生も多い。高校時代と比べ学生が人間的に成長している点は、日頃学生と接するなかで私もそう感じる人が多い。もちろん十分人間的に成長していない学生もあり、きめ細かな指導が必要である。

学部の専門科目の中で、ほとんど理解できない科目が全体の半分程度が理解不能と答えている。さらにほとんど理解できない科目が全体の80%もある学生がいる。これらの学生は、勉学もわからないので意欲もわからないであろう。かれら学生に対する教育で、いかにして理解できるようにするか重要な課題である。「学生が興味を惹かれる授業」の回答にあるように、まず、わかりやすい言葉、具体例を出すという、わかりやすい授業からはじめていく必要があると思う。

経営学部 国際経営学科

commentator

学科長：三谷 進

アンケートの結果について

今回のアンケートは、国際経営学科に所属する学生たちの現在の状況を把握する上で貴重な情報を提供してくれている。特に、今回のアンケート結果から、大学において「魅力のある授業」とは何かということを改めて考えさせられることになった。

今回のアンケートで、国際経営学科の属性を示す項目として目を引く部分は、「所属する学部・学科の先生の印象についてお答えください」という問いに対して、①「授業の準備をしっかりとっている先生」、②「学生のやる気を引き出す先生」、③「理解度を確認しながら授業を進める先生」、④「授業後、相談しやすい先生」、⑤「先生同士がお互いの授業内容を把握している」の項目が学科の教員に対する学生の印象を示しているため、それらの調査結果について、まず見ていくことにしたい。

最初に、①の「授業の準備」に関しては、「かなり多い」が10.0%、「多い」が65.5%であり、各教員の講義の準備状況については高い評価が得られていることが分かる。ただし、次の②から⑤の「やる気を引き出す」「理解度の確認」「授業後の相談」「教員同士の連携」については、「少ない」と「とても少ない」を合わせると、約70%から80%程度の水準になっており、そこに大きな問題点が存在していることが示されている。

つまり、ここで示されている状況は、各教員の講義に関する準備はしっかりとされているが、その講義内容が学生の水準とミスマッチを起こしており、学生の意欲を高めることや理解度の確認が十分ではなく、一方的に知識を与えている構造が存在しているということになっている。これは、教育のあり方をどのようにとらえるのかという問題と密接に関連しており、そこでの教育が単に「知識」を提供する場ではなく、その「意欲」や「理解」を十分に基本に据えて進んでいかなければならないということを示唆している。

さらに、上記の点については、大学教育における授業の進め方の重要な問題点が存在している。つまり、大学では、高度な専門知識の体系を提供することが重要な柱として位置づけられており、各教員が講義を通じて追求していきたい学問水準の維持と、知識を受容していく学生の水準とが対立している状況がそこには示されているのである。

これは、今回の学生の勉強平均時間の項目を見ると、その問題点がはっきりと出る。これを見ると、授業以外の1週間平均の勉強時間が、「していない」が34.5%、「2h未満」が37.3%、「2～4h未満」が14.5%となっている。つまり、1週間に2時間未満しか勉強をしていない学生が全体の7割を超えており、さらに、2～4時間未満まで含めて考えると、約85%の学生が十分な勉強を授業時間以外で行っていないということになる。

また、「学生自身について」の項目として、「簡単に単位が取れば良いと思う」という質問に対して、国際経営学科では、「大いに思う」が20.9%、「やや思う」が51.8%である結果であり、「勉学意欲があると自負できる」という質問に対しては、「大いに思う」が5.5%、「やや思う」が23.6%という結果となっている。つまり、国際経営学科の学生の約3割しか「勉学意欲」がなく、約7割の学生は、講義では簡単に単位が取

得できればよいと考えている状況となっている。

このように、現在の学科において直面している問題とは、学生の学習に対する意欲の低下という「モラルハザード」の状況が存在しているということであり、学科として取り組むべきポイントとしては、より根本的には、学生たちの学ぶ「意欲」をいかに高めていくのか、そのための環境をどのように整備していくのかということになる。

これは、単に、大学教育の問題だけではなく、それまでの学生たちが受けてきた様々な教育環境において、学ぶことの楽しさや、知的好奇心を満足させるために自発的に勉強していく姿勢といった基本的な学習におけるモラルの部分が十分に醸成されてこなかったということの意味しており、再び、大学において、その「意欲」をいかに回復させていくのかということが大きな課題となっている。

本来、大学の授業というのは、単に講義に出席すれば身につくというものではなく、その前後においての自発的な知識の修得や、講義内容についての自分自身の問題意識の形成が必要になる。これは、学生たち自身が、自分の学んでいる学問内容に対して、学んでいる意義を十分に実感していくことが必要であり、学生たちが、将来の社会における自分の存在意義を考え、自分自身の目標をもって、積極的・自発的に勉強や研究を進めていくという「意識」の部分を改善していくことが重要となる。

学生自身が授業のための準備をほとんどせずに授業に出席しているというのは、教員が「授業の準備をしっかりとしている」という状況と対照的であり、この「授業を受ける者」と「授業を行う者」との非対称的な状況を解消しない限り、実は、授業改善の本来の目的は果たせないということになる。それでは、いかにして、学生たちに十分に授業の準備をさせ、その勉強時間を確保させることができるのだろうか。

この点について、現在、国際的な注目を集めているのがフィンランドの事例である。経済協力開発機構(OECD)が、2000年と2003年に行った「生徒の学習到達度調査(PISA)」において、フィンランドは、2000年には1位、2003年には2位というトップクラスの評価を受け、現在、その教育内容についての国際的な検討が進められている(なお、この点については、福田誠治『競争やめたら学力世界一・フィンランド教育の成功』(朝日選書、2006年5月を参照されたい)。

特に、そこで強調されているポイントとしては、学習とは「自分の人生に必要な知識を自ら求め、知識を構成していく活動」であり、「知識は、自ら学ぶ者が事実を分析・探求して、自分なりに作り上げていく」という「構成主義」の考え方がフィンランドでは主流となっているということである(同上書、114-115頁)。このような主体的に学んでいくという意識を学生たちに認識させ、その環境を整備することができれば、学生に強制しなくても、自発的に自らの問題意識にあわせて勉強を進めていくことが可能になるだろう。

国際経営学科としての改善のポイント

それでは、上記のような問題意識をもとに、今後の国際経営学科としての改善のポイントについて考えていくことにしたい。

まず、今回のアンケートを通じて判明したのは、「授業を行う者」と「授業を受ける者」との非対称的な構造の存在と、そこでの学生のモラルハザードの問題である。この問題は、その授業の受け手である学生の「意欲」の所在が重要なポイントとして存在しているが、またそれは同時に、その意欲を引き出す「授業を行う教員」のサブライサイドの問題でもある。

今回のアンケートの「授業科目の印象」の質問において、「内容が魅力的な科目」「学習内容が面白い科目」といった項目では、約7割の学生が「少ない」「とても少ない」という回答をしており、これは、講義において、「具体的な例」を示しながら「分かりやすい言葉」で講義をしてもらいたいという学生の要望が7割程度存在していることとも対応していると思われる。

専門教育では、一般に、学術的に厳密に定義された専門用語を十分に理解させ、それらの内容を理論的・体系的に展開していくことのために、十分な基本的な概念の理解がなければ、ほとんど講義の内容が理解できないものになってしまうだろう。授業時間以外に勉強していない学生たちにとっては、講義で話される専門用語は常に初めて聴くものであり、その内容を90分の時間内でどの程度理解できるのかということについても問題がある。また、専門教育において使用される用語や概念の十分な理解がなされないまま、その後の講義をずっと聴いていても、その内容は面白くもないし、魅力的でもないだろう。

また、この問題は、各教員が個別の講義においてマイクロレベルで取り組むべき課題と、学科および学部さらには、大学全体で取り組むべきマクロレベルでの課題が存在しており、それらが相互に有機的なつながりをもって進んでいかなければならない性格をもったものである。単なる一教員、一学科、一学部の問題としてのみ議論するのではなく、大学全体のあり方として、この問題を認識し、そこでの全体の取り組みをどのようにしていくのかということを明確な理念に基づいて進めていかなければ解決できない問題でもある。

この各教員のレベルの問題については、教員間での個性性が強く、また、個々の教員の現在の講義のあり方や、そのゼミナール等での研究指導のあり方について具体的に論じていく必要があり、今後、学科会議や教育制度改革委員会等での議論を通じて、各教員の教育方法の改善を進めていくことにしたい。

次に、学科および学部レベルの問題については、経営学部および国際経営学科の学生の全体の意欲を高めていくことが重要な課題であり、そこでは、教員と個々の学生たちとのコミュニケーションの水準が問題になる。つまり、各学生がどのような領域に関心を持ち、また、将来のどのような生き方を選択していくのかということを教員が把握した上で、それに合わせた的確なアドバイスが必要になるからである。学生の視点から言えば、自分自身の将来にとってプラスになるという認識や、自分の力が高められているという認識を絶えず再確認でき、それに対して時宜に合った的確な教員のサポートがあれば、その勉強や研究への意欲は高められていくことになる。

経営学部では、昨年度のカリキュラムの改革を通じて、1年次から「基礎ゼミナール」を必修にし、その後の「専門ゼミナール」と連動させる形で、個々の学生と教員との間のコミュニケーションの水準を高めていこうという取り組みを行っている。

また、今回のカリキュラムの見直しは、学部内の教育制度のあり方について検討するために、教育制度改革委員会を設置し、学生の教育・研究環境の充実を図ってきた成果でもある。特に、国際経営学科では、学科としての魅力を高めるために、「アメリカ企業論」や「EU企業論」等の科目を新設するなど、学生のニーズに対応した教育内容の拡充を進めてきている。

また、学生の研究に対する意欲を高めるために、経営学部のゼミナールが参加して行われる「研究プレゼンテーションコンテスト」、「論文

コンテスト」、「ビジネスプランコンテスト」などの様々な行事が実施されている。さらに、ゼミナール間の学生同士のコミュニケーションを深め、経営学部の活性化を図る組織として「ゼミナール協議会」があり、学生の意欲の向上に一定の成果を収めている。その他にも、税理士・会計士を目指す学生たちに対して、少人数の「会計特別クラス」を設置し、チューターによる指導を通じて、講義以外の学習システムの構築を進めようとしてきている。

このように、学科および学部のレベルでは、現在、学生の意欲や、その理解度の水準をいかに高めていくのかということを体系的に検討してきており、今後、教員相互の各授業に関するコミュニケーションの取り方や、経営学部および国際経営学科でのカリキュラム体系のあり方についても具体的な議論を進めていきたいと考えている。

経済学部 経済学科

commentator

学科長：松尾 秀雄

今回のアンケートは、総数6399サンプルの回収という大規模なものであった。経済学科では、1年生140、2年生64、3年生64、合計268サンプルの協力が得られた。

まず、回答者の性別では、男性85.1%、女性が14.9%であり、これは、ほぼ正確に在籍者の男女比を反映していると評価できる。学年では、1年生が52%で、過半数を占め、入学当初の学生の授業満足度を、このアンケートによって分析できるという特徴がみられる。

住環境では、自宅を含む借家つきが73%で、一人暮らし26.9%、の数字が出た。これも、経済学科学生が、東海3県を中心に、4分の3が自宅、4分の1がアパート住まいという状況を正確に反映していると思われる。

通学時間では、90分以上が約2割、60～90分が4分の1、30～60分が22%、30分未満が32%であり、ほぼ無理なく通学できていると分析できる。

ここでの改善点として想起されるのは、男女比の改善、男子に偏重している状況の改善をおこなうことが、第一点である。第二には、出身学生が地元偏重に過ぎているという問題である。名城大学が全国規模で知名度を高め、全国、全世界から優秀な学生を集めるように成長してゆかねばならないだろう。

第三は、通学時間であり、学生が余裕をもって9時10分からの授業に参加できなければ、4年間での124単位取得は難しく、2時間以上であれば、大学に通学が困難で、無理が生じ、学業の継続が困難となる。かといって、アパートでは経費がかかりすぎ、両親への負担、アルバイトへの偏重となってゆく。アンケートでは、もう少し細かい、通学時間の分析ができるように、工夫がほしい。

アルバイトの状況は、していないが17%、1日以下が2%、2～3日が43%、4～5日が36%、6～7日が0.7%であり、やはり、アルバイトが1年生から相当な割合で学生生活の大きな部分を占めているところを実証している。経済的な問題が学業を圧迫するという現象が、経済学科においても確認できた。今後の問題であるが、解決は難しいであろう。

この学科に入学してどうだったか、大いによかったと思うで、かなり多い授業、の組み合わせが46.2%であり、第一印象としては、ほぼ半分に達していた。多いでは35%であり、期待はずれの授業は2割程度だという評価が得られる。

これに反して、科目理解度は、相対的に低くなる。かなり多くの科目で70%以上の理解度だと学生自身が感じている割合は、約2割、この数字は多いに問題であろう。教授陣が丁寧に授業しているつもりになっても、学生の理解度は、かなりの科目でついていけないということである。今後の改善の最重要課題となろう。

私語に対する問題は、授業の質を向上させる上で、不可欠の重要課題であるが、このアンケートを分析するかぎり、半分の講義で私語の問題が解決されていないという結果が読み取れる。私語があると、どんなに優秀な教授が熱心に授業を行っても、その効果が半減する。学生に自覚を促すなど、教授陣と学生との友好的なコミュニケーションを確保しつつ、学生の興味をそそるような、工夫された講義をしていかなければ、名城大学の将来はないと思われる。

学生の興味がわくような身近な話題で講義を進めているという授業が全体で、少ないと感じた割合が、56%もあり、私語の誘発は、教授陣・学生の真摯な態度の相乗効果で出てくるものと分析できる。

魅力的な授業がかなり多いは、268の母数の1.1%、という結果であった。多いは、42.9%であり、総括が許されるならば、半分は、学生が退屈し、半分は、学生が面白いと思って受講している、ということになる。これは由々しき問題であり、学生の理解度などを絶えずレポートなどで確認するなど、教授陣の意識や実践において、多大なる改善が要求されていると思われる。

勉強に前向きな学生がどれだけいるかという印象を聞いた質問には、少ないが7割を超えており、熱心な学生は、学科全体で2～3割、これらの学生が受講生をリードしており、結果としては、学科長自身が自分の講義で実感している熱心な学生数とほぼ一致した。熱心でないような学生は、講義を欠席して、単位だけを欲しがる学生であり、レポートを課したら、授業を聞かず、レポートだけ提出という態度になりかねず、熱心な学生は、毎回、最前列で聴講するというギャップが顕著である。教授陣の講義の質のボトムアップも重要であるが、学生の質のボトムアップが図られなければ、社会的な評価を落とすことになろう。

今回の学生の授業満足度は、教授陣が準備をしているとおもう科目が多いと感じた学生が7割を占めたことに象徴されるように、学生が教授陣を信頼しきっていないこと、教授陣も、自分の講義の内容を学生の実際の学力に即して準備していないこと、など多数の事実が浮かび上がった。学生が積極的になれるような大学の全体の環境整備が急務であると結論できる。

経済学部 産業社会学科

commentator 学科長：岸川 富士夫

「学部・学科への満足」を見ると、産業社会学科については、入学してよかったと思う学生は59.5%（「大いに思う」と「やや思う」の合計）であり、経済学科の64.2%より低くなっている。さらに、このことに対応するように、学生の授業評価においても、産業社会学科は、経済学科と比較して、概ねやや低い評価となっている。また、「4年間の学習の流れ」については、体系的に理解できていない学生が多く存在する。

以上のことを考慮すると、産業社会学科には、学生とのコミュニケーションを緊密にし、学生一人ひとりと向き合って、彼らの意欲と力を引き出すことが求められている、と言える。産業社会学科では、本年度からゼミナールを中心にして、学生一人ひとりの意欲と力の現状を理解し、そのうえで彼らに働きかけをおこない、彼らを向上させていくことに取り組んでいる。この取り組みは、学生が産業社会学科で学ぶことの意義をたえず実感できるようにする試みでもある。

このような教育の活性化のための努力をおこなうとともに、産業社会学科の独自性をアピールし、産業社会学科を「ぜひ入学し、学びたい」と思われる学科にすることが、なによりも重要である。さいわいなことに、1年生においては産業社会学科に入学してよかったと思う学生が65.4%と平均よりも高い評価を示している。この傾向を大事にし、さらに、その数字が高くなるように、産業社会学科全体として努力しなければならない。

理工学部 数学科

commentator 学科長：北岡 良之

1番のショックは、数学科に入学した事に対しては比較的満足度が高かったのに比べて勉強時間の少なさである。

わかりやすい授業をというので説明を丁寧にと心掛けて講義内容は減っていく傾向にある。しかし講義が難しいということの原因に復習時間の不足があるなら話は別である。

一本のホームランを打って脚光を浴びるのにどれくらい（面白くもない）トレーニングを積んでいるのかを想像して欲しい。次回は復習時間が少ない人に、なぜ復習時間が少ないのか、どのようになれば復習時間を増やすのか、という質問項目を設けていただけると有り難い。

理工学部 情報工学科

commentator 学科長：津川 定之

イ、各学科では、アンケート結果をどのように受け止めたか ※（ ）内の数字の単位は%

(1) 学生の1週間平均勉強時間：学部全体よりもやや少なく、最も良く勉強する機械と比較すると彼らの半分程度である。

情報 していない(12.1)、2時間未満(29.1)、2時間～4時間(23.3)

機械 していない(2.9)、2時間未満(14.9)、2時間～4時間(28.4)

勉学意欲があると自負する学生：理工全体よりも少ない。

情報 大いに思う(6.3)、やや思う(18.9)、あまり思わない(60.7)

理工 大いに思う(4.8)、やや思う(25.8)、あまり思わない(53.9)

(2) 学部、学科に入学してよかった：学部全体よりも多いが、建築よりも少ない。

情報 大いに思う(8.7)、やや思う(56.3)

理工 大いに思う(11.6)、やや思う(49.4)

建築 大いに思う(18.1)、やや思う(57.1)

良かったと思う学生は3年生では減少する。

2年生 大いに思う(11.0)、やや思う(55.1)

3年生 大いに思う(5.7)、やや思う(58.0)

(3) 授業

新しいことを学べたか:学部全体よりも多い。

情報 かなり多い(30.1)、多い(60.7)

理工 かなり多い(17.0)、多い(57.3)

内容が魅力的な科目:学部全体と同程度。

情報 かなり多い(1.5)、多い(32.5)

理工 かなり多い(2.2)、多い(31.8)

楽勝科目:学部全体よりも少ない。

情報 かなり多い(1.0)、多い(8.7)、少ない(57.3)、とても少ない(33.0)

理工 かなり多い(2.0)、多い(18.9)、少ない(54.9)、とても少ない(24.2)

入学前イメージ通りの授業:学部全体よりも多い。

情報 かなり多い(1.0)、多い(29.1)、少ない(49.5)

理工 かなり多い(1.5)、多い(23.4)、少ない(54.6)

授業の準備をしっかりとする教員:学部全体よりも多い。

情報 かなり多い(10.2)、多い(66.0)、少ない(22.8)

理工 かなり多い(5.9)、多い(57.9)、少ない(32.2)

(4) 理解不能科目:学部全体よりも多い。

情報 80%程度(16.0)、50%程度(43.7)、30%程度(32.0)

理工 80%程度(12.3)、50%程度(36.9)、30%程度(37.0)

(5) 学生が望む授業:楽に単位が取れて多くの知識を得る授業を望む。

情報 教科書通り(5.8)、多くの知識(48.1)、単位が簡単(18.4)

理工 教科書通り(7.9)、多くの知識(49.8)、単位が簡単(16.9)

(6) 学生が興味を惹かれる授業:情報では具体的な例をわかりやすい言葉で説明する必要がある。

情報 板書が見よい(13.1)、具体的な例を示す(33.0)、わかりやすい言葉(41.3)

理工 板書が見よい(21.4)、具体的な例を示す(25.9)、わかりやすい言葉(38.0)

(7) 気を遣って欲しいこと:情報ではとりわけ個々の学力への対応を望む。

情報 板書(21.4)、話し方(16.0)、学生個々の学力対応(39.8)

理工 板書(29.1)、話し方(16.9)、学生個々の学力対応(29.1)

個別対応は、3年生(31.8)では2年生(45.8)の2/3に減少する。

ロ、各学科では、アンケート結果を受け止めての今後の改善のポイントについて

【情報の学生の全体像】

(1) 情報の学生の勉強時間が平均より少ない。勉強意欲も平均より低い。

(2) 2/3の学生は情報に入学してよかったと考えている。これは学部全体よりも多い。

(3) 準備をしっかりとする教員も多く、授業では新しいことが多く学べるが、概して難しい。具体的な例をわかりやすい言葉で説明する必要がある。

(4) 講義が難しく、学生間の学力差が大きくなり、学生個々の学力への対応を望むのではないかと想像する。

(5) 難しい講義が多いことと勉強時間が少ないことが悪循環に陥っている可能性がある。

【教員側の反省点】

(1) 講義をわかりやすくするために、具体的な例をわかりやすい言葉で説明する必要がある。

(2) 具体策は難しいが、学生に勉強意欲をもたせ、もっと自宅で勉強させる工夫が必要である。

理工学部 電気電子工学科

commentator

学科長：大江 俊美

【回答者の属性】

2年次生 38名、3年次生 127名、合計 165名のアンケート結果である。

以下、項目別に回答の割合%の多い順に整理してみた。2年生と3年生では、多少結果が異なる。以下の数値は、電気電子工学科(2年生+3年生)としての数値を示す。

【学生にとって魅力ある授業】

- 何年次の授業から理解できない科目が増えてきましたか？
2年次の途中から 62%、3年次の途中から 15%
- 授業で最も教員が気を遣ってほしいことはなんですか？
板書の仕方 44.2%、学生個々の学力対処 25.5%
話し方 10.3%、双方向授業の展開 9.7%
授業中の学生の私語対応 4.2%
- あなたが学部の専門科目の中で、ほとんど理解できない科目は全体の中のどの程度ありますか？
50%程度 35.2%、30%程度 32.7%、80%程度 20.6%
- あなたはどのような授業内容に興味を惹かれますか？
わかりやすい言葉を使う 38.4%、板書が見やすい 31.5%
プリント等で具体的な例を示す 18.8%、言葉が聞き取りやすい 5.5%
- あなたはどのような授業であれば満足できますか？
多くの知識を教えてくれる 30.9%、雑談は少ないがじっくり進む 27.9%
簡単に単位が取れる 21.2%、教科書通りに進む 7.3%

現在、系入試が行われているので、1年次の講義には専門科目は無い。そのため、高校の延長線上で、1年次の講義については比較的簡単に単位が取れているようである。(学生談)

ところが、2年次になると各科とも専門科目の講義が始まり、講義について行けない学生が急激に増加していることがわかる(設問1)。さらに、専門科目の内、50%程度の科目が理解できないと答えた学生が35%、80%程度の科目が理解できないと答えた学生が21%もいることは注目に値する(設問3)。教員は、このような状況を認識した上で、講義の進め方に最大限の配慮をしなければいけない。専門科目には専門用語が沢山出てくるが、分かり易く解説し、特に板書は見やすく丁寧に行うことが望まれる。さらに、学生の理解度を確認しながら、学生個々の学力に対応した講義を行うよう努力しなければならない。

【学生自身について】

- 簡単に単位が取れば良いと思う
やや思う 44.8%、大いに思う 27.0%
- この学部・学科へ入学して良かった
あまり思わない 43.0%、やや思う 33.9%、全く思わない 16.4%、大いに思う 6.1%
- 勉学意欲があると自負できる
あまり思わない 56.4%、やや思う 26.7%、全く思わない 12.7%、大いに思う 4.2%
電気電子工学科に入学して良かったと思っている学生は40%(やや思う+大いに思う)で、他学科と比較して非常に低い数値である。さらに、勉学意欲のある学生が少なく、簡単に単位が取れば良いと思っている学生の多いことがわかる。

【所属学部・学科教員の印象】

- 授業の準備をしっかりとっていると感じる先生
多い 58.5%、少ない 30.9%、かなり多い 7.9%
- 学生のやる気を引き出す先生
少ない 62.4%、とても少ない 21.2%、かなり多い 16.4%
- 理解度を確認しながら授業を進める先生
少ない 61.8%、とても少ない 23.0%、多い 14.5%
- 授業後、相談しやすい先生
少ない 63.0%、とても少ない 24.2%、多い 11.5%

13 先生同士がお互いの授業内容を把握している

少ない 56.4%、とても少ない 22.4%、多い 20.0%

いずれの項目についても学生の評価は厳しいことがわかる。各教員は一生懸命努力をしているが(設問9)、学生との意思の疎通はあまりうまくいっていないようである。特に(設問12)などについては、どの教員も大歓迎であるが、敷居が高いのか相談に来る学生は少ない。(設問13)「先生同士がお互いの授業内容を把握している」かについては、関連科目の教員間連絡ネットワークで重複内容を調整している。

【授業科目印象評価】

14 内容が魅力的な科目

少ない 52.1%、多い 32.1%、とても少ない 13.8%

15 単位が簡単に取れてしまう言わば「楽勝」科目

とても少ない 52.7%、少ない 41.2%

16 学習内容が面白い科目

少ない 60.6%、多い 19.4%、とても少ない 18.2%

17 勉強に前向きな学生の雰囲気

少ない 61.2%、多い 24.8%、とても少ない 11.5%

さすがに、専門科目の単位の取得は難しいと思っている学生が多いことがわかる。その認識は正しいが、勉強に前向きな学生の割合が少ないことが残念である。専門科目を面白く、魅力的に講義することは至難の技であるが、教員の一層の努力が望まれる。

【授業科目評価】

18 大切なポイントはきちんと示してから話をする授業

少ない 58.2%、多い 25.5%、とても少ない 13.9%

19 私語に対し、きちんと対応するなど学習環境が整った授業

多い 53.9%、少ない 35.2%、かなり多い 6.1%

20 学生の努力を認めた上での適切な成績評価を行う授業

少ない 50.9%、多い 37.6%、とても少ない 10.3%

21 学生に興味がわくように工夫した進め方の授業

少ない 55.2%、とても少ない 26.7%、多い 17.0%

今回のアンケート結果は、かなり厳しいものがあります。教員はそれほど深刻に考えていなかったのではないかと思います。本気になって教育改革に取り組まなければと決意を新たにしました。

理工学部 材料機能工学科

commentator

学科長：猿木 勝司

授業科目については、「新しいことを学べた授業が多い」と感じている学生が84%と理工全体の平均より10ポイント高かった。また、「将来仕事に役立つ授業が多い」と感じている学生は49%とこれも理工全体の平均より10ポイント高かった。なお、学生のなかで当学科の授業では「単位が簡単に取れる科目が多い」と思っている学生は8%、これは理工全体の平均より14ポイント低く、当学科の授業は全体的に難しいと感じているようである。しかし、授業以外の勉強時間は理工の平均と変わりなく、1週間で2時間以内のものが半数を占めており、特に勉強に精を出しているとは思われない。先生の印象としては、「授業の準備をしっかりとっている先生が多い」と感じている学生が73%、これは理工の平均より約10ポイント高かった。「授業後相談しやすい先生が多い」と感じている学生は31%、これも理工平均より10ポイント高かった。これらのことから、総じて先生にはいい印象を持っているようである。また学生自身については、「専門知識がついた」とする学生が69%と理工平均より13ポイント高く、いい結果を示している。

しかし理解不能度の項で、「ほとんど理解できない授業が半分以上ある」という学生が、60%以上もいるということは問題である。学生が希望するように個々の学力に対処する(30%の学生が希望)ため、先生は相談しやすい雰囲気をさらに高め、時間外の質問や説明に十分答えてやるとともに、授業内では理解度を確かめつつ講義を進めていくことが必要である。また、当学科ではカリキュラムの見直しも現在進めており、系統的な流れの中で順次理解を深めていけるように工夫を加えるとともに、学生の努力が認められやすい回路設計や機械設計などの科目を新設することを考えている。

理工学部 機械システム工学科

commentator

学科長：大道 武生

1.いつもFD実施の趣旨が極めてあいまいであり、今のままでは授業改善等に、なんの役にも立っていないのではないかと思います。学生の意見にもアンケートばかりで、意見がどう反映されているのか不明であるとの不満が多くあることに答えるべきだと思います。

この原因は、目標も定めずに調査を行っていることにあると思えるので、今後も、FDを続けるのであれば、まず、やるべき目標を決め、それが実施されているかどうかを、アンケートすべきでしょう。このままでは、労力と費用の無駄になります。何年も同じことをやっているのだから、課題は出尽くしている。課題に対して解決の行動指針をまとめるべきだと判断します。

2.アンケートの具体的意見については、最低でも対象の教員に伝えるべきである。意見文章をならべるだけでは、現場が混乱する一方で、改善にもつながらない。

理工学部 交通科学科

commentator

学科長：村瀬 勝彦

1週間あたりの勉強時間は、全く勉強していない学生が9.6%、2時間未満が45.7%、2時間から8時間の学生が40.5%、8時間以上が5.2%となっている。

「本学科に入学してよかったか」の項目では、大いにそう思う12.2%、ややそう思う51.7%、あまり思わない29.1%、まったく思わない7.0%となっている。

授業の理解度調査では、7割以上理解できるが43.9%、半分程度理解できるが43.5%、2割以下が12.6%である。

以上3項目の質問結果を基にすべての質問項目の比較を行っている。これによって色々な点に分かるが、例えば1週間あたりのアルバイト日数と1週間あたりの勉強時間を比較している結果を見ると、アルバイトが3日以下4日以上境界に注目して考えると、勉強時間との相関関係が読み取れよう。一週間に4日以上アルバイトするのはあまりよい結果を生まないようである。

理工学部 建設システム工学科

commentator

学科長：松井 寛

建設システム工学科で【新しいことを学べた授業】が多いと答えた割合は87.6%に達し、理工学部平均より高いことから、おおむね学科の専門教育カリキュラムに満足している。ただし【将来実際に仕事をするときに役立つと思う授業】が多いと答えた割合は61.4%に留まっており、なお工夫が必要かもしれない。ただこの数値は、理工学部平均よりは高い値となっている。また【学生が興味をわくように工夫した進め方の授業】が多いと答えた割合は24.2%に留まっており、今後も教育改善に取り組む必要がある。

授業科目の印象評価では、いわゆる楽勝科目が少ないと答えている割合が82.4%と理工学部平均より高く、演習やレポート提出などのタスクのある授業が多いことが影響しているかもしれない。また【学習内容が面白い科目】が少ないと回答した割合が68.0%もあり、興味を持ってもらう努力の必要がありそうである。

1.教育開発センターの不手際で、本学科の2、3年次の全クラスに対しアンケートが実施されなかった。

とくに、2年次は1クラスのみ(35.3%は、母数が2クラス分)であった。

2.アルバイト(週4日以上)が30.1%は、理工学部の平均24.7%に比べ多い：アルバイト自粛の喚起

3.勉強平均時間(1週間2時間未満)47.1%は、理工学部の平均38.1%に比べ多い：勉強意欲の向上

4.同一授業を異なる先生が教えることでの、授業や試験内容に不公平を感じるが71.2%は、理工学部の66.3%に比べ多い：教員同士の打ち合わせを徹底、または同一教員が受け持つ

その他の項目については、学部平均に近いが、または上回って良いと思われます。

理工学部 環境創造学科

commentator

学科長：牧野内 猛

環境創造学科の2年生(90名回答)は、系入試で入学し、2年進級時に進学する学科が決まった学生である。いっぽう3年生(38名回答)は、入学当初から進学する学科が決まっていた学生である。専門学科への進学形態の差異が、学生の感覚にも異なった趣をもたらしている。この点の分析は、今後、詳細になされなければならないが、とりあえず、2・3年生を合わせた学科全体について見てみる。

1) 学部学科への満足度

入学して「よかった」「やや思う」と感じている学生は、学部・学科の中で最も低く、これは深刻な状況と受け止める。

2) 全授業科目について

理工学部全体の傾向とやや異なる点は、興味が湧くように工夫した授業の進め方をしていないと感じる学生がやや多いことである。

3) 教員の印象

授業の準備をしっかりしている教員が多いと感じている学生が、理工学部全体より大きく上回っている。教員が熱意を持って授業に臨んでいることを学生は理解してくれている。

4) 全授業科目の印象

理工学部全体の傾向と異なるところは、入学前にイメージしていた授業内容とかなり異なっていると感じていることで、これは気がかりな点である。

5) 学生自身について

理工学部全体と比較すると、入学後、人間的に成長したり、専門知識が身についたと感じている学生が多い。しかしながら、勉強意欲があると自負している学生は少ない。

以上をまとめると、環境創造学科は、学生が入学前に持っていたイメージと大きく異なっているため、教員がしっかり準備をして授業に臨んでいることは理解してくれているものの、授業に興味を持つことが充分にできず、モチベーションが上がらない、という姿が浮かび上がる。その結果、学科に対する満足度が低くなってしまっている。教員の熱意が空回りしているのは辛いところであるが、満足度が低い点は深刻に受け止めなければならない。

環境創造学科としては、独自のアンケート調査もすでに実施し、学生に興味を持たせるには何をなすべきか、授業内容の見直しを中心に、分析・検討を始めたところである。同時に、どのような人材を育てようとしているのか、学生にしっかり理解させる努力も必要であることを感じている。

理工学部 建築学科

commentator

学科長：鈴木 博志

■ 回答者属性について

- ・ 建築学科の特性として、女性が21.5%と多い。今後、女性の受験生を増加させていく必要があるが、系入試等により受験を敬遠されていることが課題である。
- ・ 一人暮らしは26.6%と多い。これも指定校推薦が多いため、下宿生が多くなっているものと予測される。
- ・ 一人暮らしが多い分、通学時間は相対的に短い。
- ・ アルバイト時間は、学部全体と差異はない。
- ・ 勉強平均時間は、していない6.2%、2時間未満27.1%を占め、これらの学生の勉強時間を増やしていくことが課題である。学部全体と比較すると、建築学科の勉強平均時間数は、相対的に多い。
- ・ 以上、建築学科学生の属性の特徴が明瞭であるが、課題もみられる。

■ 学科への満足度

- ・ 建築学科への満足度は、学部全体と比較して、入学してよかったと大いに思う、やや思うなどの満足度が相対的に高い。建築学科内の学年別比較では、2年生より3年生の満足度の方が低いが、この理由は不明である。
- ・ 以上、学科への満足度は相対的に高いことが言える。

■ 全授業科目について

- ・ 建築学科の全授業科目について、①新しいことを学べたか、②将来に役に立つか、③ポイントを押さえた授業か、④適切な授業評価か、

⑤興味をわかせる授業かなど、これらの評価は理工学部全体と比較して相対的に高い。

一方、評価が低い項目として、③ポイントを押さえた授業か、④適切な授業評価か、⑤興味をわかせる授業かなどがあり、今後は改善する必要がある。

■全授業科目の印象

・建築学科の全授業科目の印象について、①内容が魅力的か、②単位が簡単に取れてしまうか、③学習内容がおもしろいか、④イメージどおりの授業内容か、⑤授業や試験内容に不公平があるか、などでは、理工学部全体の中で相対的に評価が高い。特に①内容が魅力的か、④イメージどおりの授業内容かの評価が高い一方、②単位が簡単に取れてしまうなどの楽勝科目が少ないことも指摘できる。

■先生の印象

・建築学科の先生の印象について、①授業の準備をしっかりとっている、②学生のやる気を引出す、③理解度を確認しながら進める、⑤先生同士がお互いの授業内容を把握しているなどの評価は、理工学部と比較して相対的に高い。しかし、④授業後、相談しやすい先生の評価では、理工学部全体と差異がなく、今後の改善課題とされる。

■学生自身について

・建築学科の学生自身の評価では、①人間的に成長、専門知識がついた、③勉強意欲がある、⑤4年間の学習の流れが分かっているなどは、理工学部の全体比べて評価が高い。また、④簡単に単位が取れば良いと思う学生も多く、今後の改善課題とされる。

■学生の望む授業

・建築学科では、多くの知識を与えてくれることを期待する学生が64.4%と多いことが分かる。
学生にとって、知識・技術の習得が重要視されていることが分かる。

■学生が興味を惹かれる授業

・理工学部全体と比較して、建築学科の場合、具体的な事例を示すが31.6%を占め、このことが学生への刺激となっている。

■理解不態度

・建築学科では、ほとんどない6.8%、30%程度49.2%と過半数を占める。一方、80%程度33.9%、ほとんどすべて7.9%が存在し、こうした学生への理解を深めていくことが課題である。

■先生に気を使ってほしいこと

・板書の仕方、30.5%、学生個々の学力対処25.4%、話し方19.2%、双方向の授業19.2%となっている。これらの状況は、理工学部全体と比較してほとんど類似の傾向を示している。

■以上、学生の評価を総合的に勘案すると、理工学部全体の中では建築学科の評価は相対的に高いことが示される。しかし、より良い授業を目指すためには、改善すべき点も明らかにされており、今後の改善・努力に期待するところが大きい。

農学部 生物資源学科

commentator

学科長：道山 弘康

生物資源学科に対しては「新しいことを学べた」という評価が高く、満足度が高かった。しかし、他学科と比較して勉強の「やる気」不足の学生が多いことが明らかであった。「将来役立つ授業」の評価が低いことから、授業の位置づけの認知が不十分であることが「やる気」不足の原因と判断している。そこで、1年生と2年生にミキサーを開催し、学科の教育内容、カリキュラムの構造、履修の流れを解説し、各授業の位置づけの明確化によって「やる気」を引き出す取り組みを行う予定である。学科では、できる対策は積極的にやっという事で盛んな議論が行われている。

農学部 応用生物化学科

commentator

学科長：松久 次雄

入学してよかったかの満足度の設問に対して、本学科は農学部内では低く、他学部・学科並みであった。これは地方出身者や農業課程出身者が少ないことと関連があると考えられるが、地元へのPRとイメージ・アップについて一層の工夫が必要であることを痛感した。講義の理解不能度について、他学科との有意差はないと推察されるが、学科内で高学年になるほど理解不能度が少なくなる度合いが他

学科より顕著であり、専門科目の教員の努力と、必修科目を多く設定して専門分野におけるステップ・アップ教育をおこなっていることが効果を現したものと考えられる。

全授業科目について新しいことを学べた授業の得点が(他学科より)高いことなど、プラスの面も多いが、興味がわくように工夫した授業の進め方については、他の項目と比較して低い評価を得ている。この点について教員一同、更なる精進が必要であろう。

先生同士が互いの授業内容を把握しているか否かの設問では、否定的な評価が示されたが、これは予想された結果であり、関連科目で重複した内容をいかに調整し、学生に飽きさせない授業をするか、今後の課題であろう。それには授業計画書に沿った授業をする一方で、関連科目の講義内容について教員も目を通して、内容を調整することが望ましい。

楽勝科目の多寡について、他学科と比べて少ないとの回答を得たが、その割には内容が魅力的な授業が多いとの回答が相対的に多かった。これは本学科の学生が、単純に易しい内容のものではなく、積極的に学ぶ意欲を有していることの証しであると考えられる。

農学部 生物環境科学科

commentator

学科長：有田 豊

生物環境科学科は2005年に新しく開講された学科であるために1年次生のためのアンケート回答である。

■ 学部・学科への満足

生物資源学科と応用生物化学科と比べて満足度が約7割とやや低い。この低い原因の一つとして考えられるのは、この学科の入学試験の一つに第2志望制があり、学生の何割かはこの制度で不本意な入学をしたからと思われる。また、1年次においては全学共通教育科目がほとんどで、専門教育科目は数科目しか開講されていないことにも原因があると考えられる。

オリエンテーションにおいて、学科の教育目標と教育課程の関連性および教育課程における各学年の位置づけをしっかりと丁寧に説明する必要性を感じる。

■ 全授業科目について

「新しいことが学べた授業」が農学部平均に比べて少ないが、「将来、実際に仕事をするときに役立つと思う授業」は農学部平均と変わらない。この差は良く理解できない。

「学生に興味がわくように工夫した進め方の授業」は農学部平均に比べて大変少ない。これは1年次生の授業科目が専門科目を担当している専任教員の授業がほとんどなく、1点目の事項とあわせて考えると教養教育科目中心なのでその不満の表れが出ているように思われる。1年次生の授業科目に専門科目を入れる工夫が必要かもしれない。

■ 全授業科目の印象

「内容が魅力的な科目」や「学習内容が面白い科目」が農学部平均に比べて低い。特に、後者が低い。このことはこの学科が現在1年次生のみで専門科目の開講がないためだと考えられる。このことは「入学以前のイメージ通りの授業内容の科目」が少ない(とても少ない)にも良く表れている。改善策としては、全学共通教育の意義をしっかりとガイダンスすることに加え、前項目同様に1年次生の授業科目にこの生物環境科学科の環境関連科目を取り入れるのも一つの解決策と思われる。

■ 先生の印象

「学生のやる気を引き出す先生」と「理解度を確認しながら授業を進める先生」の2項目は農学部平均と比べてかなり高い。このことは、前項目の「全授業について」や「全授業の科目の印象」が低い評価であったことと比べると好対照である。また「授業後、相談しやすい先生」も特に高い。このことは、一部の教員の高い好印象による影響なのかもしれない。「授業の準備をしっかりとしていると感じる先生」も約8割とかなり高いが、学生がその内容に魅力を感じているかどうかについても質問を関連させて行う必要があったかも知れない。

■ 学生自身について

「大学に入ってから人間的に成長した」、「大学に入ってから専門知識がついた」および「4年間の学習の流れが分かっている」の3項目が農学部の平均と比べてかなり低い。特に「大学に入ってから専門知識がついた」とは感じていない。このことは、この学科に入学して間もないことと、専門科目がまだ少ないためであると考えられる。今後、上級学年になりこの学科の環境科学に関する専門科目の講義が増えれば専門知識が増えるとともに理解も深まり、また人間的にも成長すると考えられる。

今後、入学時点のガイダンスで、4年間の学習の流れをもっと詳しく丁寧に判りやすく説明する工夫も必要かと思われる。

■ 学生の望む授業

農学部平均と比較して多いのは、「教科書どおりに進む」と「じっくり進む」で、「多くの知識を教えてくれる」は反対にやや少なかった。この結果は少し意外な感じがする。特に多くの知識を教えてくれる授業を望む学生が52.9%しかいないのだろうか。

生物環境科学科の1年次生は自ら学ぶとか、自ら切り拓くことに、まだ目覚めていない学生が多いことを示しているとも考えられ、学生

にはより自主的・積極的な学習姿勢を望みたい。

■ 学生が興味を惹かれる授業

「具体的な例を示す」や「分かりやすい言葉」を求める学生が多い。当たり前のことながら学生は教員の講義に対して、多くの専門的な内容で具体的な例を示してそれらを分かりやすく説明してほしいと望んでいる。教員も学生の望む「分かりやすい講義」の意味を理解して講義を準備するよう促したい。

■ 理解不能度

学部の特設科目の中で、ほとんど理解できない科目が全体のどの程度あるかの質問である。生物環境科学科ではこの調査時点では専門科目はほとんど開講していない。

この学科の学生の39.2%は50%しか理解できず、14.7%の学生が80%またはほとんど全てを理解できないと回答している。理解できない科目がほとんどないまたは30%程度と回答した学生は45.1%であった。学生のおよそ半数が専門科目の講義を理解できたことになる。大学に入ってから専門知識が身についたと思わないという解答が59.8%もあったが、学生は専門知識を身につけたいと思いつつも、専門科目があまり理解できないとしている。今後、教員は学生に対して専門科目を「分かりやすい講義」を目指さなければならない。

■ 先生に気を遣ってほしいこと

「板書の仕方」、「話し方」、「双方向の授業展開」、「学生個々の学力対処」などの要求が高く、特に「板書の仕方」の要求が多かった。学生は「きれいに丁寧に板書し、分かりやすく講義をして、ときどき学生に話しかけ、質問をする」講義を望んでいることが伺われる。

薬学部 医療薬学科

commentator

学科長：春名 光昌

1. 回答者属性

医療薬学科は、男性36.7%、女性63.3%で薬学科の比率（男性47.4%、女性52.3%）に比べ、女性の比率が高い事が特徴である。家から通学している学生は82.7%にのぼり、下宿生は17.3%となっている。この事を反映し、通学時間が30分未満の学生が28.3%であるのに対し、30～60分未満の学生は26.0%、60分以上の学生は45.7%であり、90分以上をかけて通学する学生も17.6%存在する。アルバイトについては、していないか1日以下の学生が40.8%で、2～5日が58.4%、さらに0.5%の学生が毎日行っている。また授業以外で1週間に勉強する時間は、約半数の学生が2時間未満となっており、2～8時間と1日1時間未満の学生が約40%、約2時間以上の学生は7.9%に過ぎない。

2. 学部・学科への満足

医療薬学科に入学して、大いに満足およびやや満足と答えた学生が82.4%にのぼり、あまり思わないと全く思わない学生の合計17.1%を大きく上回っている。また、上級学年になるに従って、大いに満足している学生とあまり満足していない学生の増加が見られ、全く満足していない学生の比率が3年生では1年生の2倍以上になっている。専門科目が増えるに従い、理解できない学生や興味が持てない学生が増えていることを示している。

3. 全授業科目について

全科目を平均すると新しいことを学べた授業が多いと評価している学生が90.8%存在し、将来に役立つ授業についても77.3%の学生が認めている。両者を年次変化で見ると、1年次の授業よりも専門性の高い2年次、3年次になるに従ってそれらの比率が大きくなっている。しかしながら、学生の努力を認めた上で適切な成績評価を行っているとは判断している学生の比率は、専門科目が多い上級年へ行くほど落ちている。さらに、大切なポイントを話してから行う授業が少ないと感じている学生が61.5%いることや学生に興味をわくように工夫した授業が全体評価で26.8%に止まっていることは、見直すべきであろう。

4. 全授業科目の印象

全学年を通じて61.8%の学生は、授業内容が魅力的な科目が多いと評価しており、現在の学習内容および入学以前に持っていたイメージ通りの科目が多いと評価する学生の比率は、いずれも45%前後になっている。また、単位の取得が簡単ではないと感じる学生が90%以上存在していることは、学生の講義時間以外の勉強時間と相関している。しかしながら、同一授業を異なる先生が教える不公平感を67.6%の学生が感じており、この傾向は高学年になるにつれて増加（61.8→70.9→72.7%）が見られ、これからの改良点として考慮すべきである。

5. 先生の印象

全学年を通じて授業の準備をしっかりとっていると感じる先生が82.1%いると評価しているが、学生のやる気を引き出す、理解度の確認および授業後の相談のし易さを感じている学生は、いずれも30%程度となっている。さらに、専門基礎科目の多い2年次で理解度の確認を行いながら授業を進める先生は15.4%と少なくなっており、薬学基礎科目を理解させる方策が必要である。また、先生同士がお互いの

授業内容の把握がされていないと感じる学生が77.5%存在するが、学生の求める連携した講義と教員が考える講義の多様性の融合を図っていく必要性を感じる。

6. 学生自身について

全学年を通じて入学後の人間的な成長を感じている学生は72.9%であるが、高学年に行くほど多くなり、3年次で80.9%に達している。この傾向は、3年次の専門知識量が94.6%と大きくなっており、学生の成長が観察される結果となっている。一方、1年次→3年次における学生の勉学意欲と4年間の学習の流れは、同様の傾向を示しており、3年次における比率も50%以下を示していることから、薬学教育の流れを今一度理解させておく必要がある。また単位が簡単にとれれば良いと思う学生が全学年を通じて64.2%も存在し、高学年になってもその変化が見られていないことは注意が必要である。

7. 学生の望む授業および学生が興味を惹かれる授業

全学年を通じて約55%の学生が多くの知識を教えてくれる授業を望んでいると同時にじっくり進んで欲しい事を願っており、教科書通りの授業はあまり希望していない。また、当然であるが、分かり易い言葉で、具体的な例を示し、板書が見やすく、聞き取り易い授業に興味を惹かれる結果が得られている。

8. 理解不能度および先生に気を遣ってほしいこと

全学年を通じてほとんど理解できない専門科目が30%未満ある学生が52.1%おり、50%程度ある学生は32.9%存在する。3年次では、理解できない科目が30%未満ある学生が60.9%と増加していることから、下級年次の知識の蓄積が少し反映されている。しかしながら、理解不能科目が80%以上ある学生が14.3%存在しており、その取組が必要である。また、授業で先生に気を遣って欲しい内容は、話し方および板書の仕方への要望がほぼ同率となっているが、高学年に行くに従って話し方および学生個々の学力への対処の比率が増加しており、学生が授業をより理解していく方法を要求している。

薬学部 薬学科

commentator

学科長：小嶋 仲夫

薬学科は、医療薬学科に比べて大きな違いはないが、男性比率がやや高く、一人暮らしも多いためか、通学時間が長く、「アルバイトをしていない」割合も多い。勉強時間では、週平均2時間未満の学生が一番多いというのは問題です。社会的な体験の点でアルバイトのメリットはわかるが、生活費確保のためということであれば、何らかの対策も必要と思われます。

他学部と比べると、薬学部学生の満足度(とくに「大いに思う」)は際立って高く、これに応じて今後これを一層高めていく責任を痛感します。

「先生からのご意見」

1. 学生の授業評価について

アンケート結果を全体的にみると、カリキュラムと科目の設定はおそらく満足のいくものと考えられ、実際に他の学部と比べても、社会に出てから役に立つ授業が行われ、成績評価も適切であると思われます。しかし、授業のポイントを示すとか興味を引き出す工夫などが不足していることは、どの学部にも共通しており、全学的に検討すべき課題です。

また、全般的に授業はよく準備されており、単位も簡単に取れない厳しいものである、と受け止められています。それなのに、「先生の印象」はかなり悪い。これは、教員も学生もお互い努力しているはずなのに、残念なことです。お互いの意向がすれ違っている。努力を確実に実らせるためには、今すぐ、日常的な改善を呼びかけ、努力の結果がすぐに分かるような、双方のコミュニケーションをとれる仕組みにする必要があります。

一方、学生自身は、「大学に入ってよく成長し、専門的知識を身につけた」としており、授業の効果は基本的には挙がっている、とみることもできます。しかし、勉学への意欲が低いのは、授業内容の問題にも関連しており、4年間の学習プロセスへの理解が不足しているのも、全学に共通する課題です。

2. 教員参考について

やはり、授業に求めるのは多くの知識である、というのが学生の基本的な立場のようです。しかし、ほとんど理解できない科目が3割程度はありそうだとする学生が結構いるのは問題です。昔は、難解な授業はレベルが高い証拠とされていたこともあり、この問題にはあまり手を付けられていないのかもしれませんが。学生の印象を、こういうアンケートで教員に正確に伝え、対策を考えてもらうことがまず必要です。これに関連して、「板書と話し方に気を遣ってほしい」と、全学年を通じて6割から7割の学生が望んでいます。分かりやすい言葉で、具体的な例を示しながら展開すること、いわば授業の基本に戻ること、それが満たされている授業に興味もたれています。この点についても教員はそれほど深刻に考えていなかったのではないかと思います。本気で取り組むべき課題といえます。

双方向授業への希望は思ったほど多くはないが、学生数が多いためか、ある程度あきらめもあるのかもしれません。

都市情報学部 都市情報学科

commentator 教務委員長：大野 栄治

今回のアンケート調査の集計結果について、数値だけの単純な解釈としては、本学部の授業内容については「新しいことであると思う」と応えた学生が全体の86%を占めており、反面、「将来役立つことであるかどうか分からないorあまり魅力的でない」と自身半疑な学生が14%存在している。また、授業方法については「しっかり準備された授業であると思う」が全体の85%を占めており、反面、「授業の進め方に不満がある」と15%の学生が応えている。従って、本学部では、調査票に評価対象として列挙された授業方法の全項目について改善の必要性があると思料している。

しかし、授業方法の全項目を改善するためには相当な時間が必要である。そこで、授業方法の各項目に優先度を付けて取り組みれば効率的に改善できると思われるが、今回の報告書では何をどうすればよいかが見えてこない。例えば、満足度と科目理解度の相関関係を分析したり、科目理解度に対する授業方法の各項目の寄与度を分析したりすれば、満足度の高い授業を実現するために、教員は何から手を付ければよいかが分かる。また、多変量解析によって満足度の高い授業とはどういう授業かということも分かるはずである。FD委員会には、この貴重な個人データを単純なクロス集計分析で終わらせることなく、教員に対する示唆に富んだ分析を期待する。

なお、本学部において、「1週間の勉強平均時間が2時間未満」と応えた学生が全体の62%であるという事実には愕然とする。文部科学省からの指導に基づき多くの地域の教育委員会では、小学生の勉強時間として毎日「学年数×10分～15分」を確保するよう指導しているが、本学部学生の60%は小学校2年生の勉強時間に負けている状況である。因みに、小学校6年生の勉強時間に勝っている学生は10%未満であり、そういう学生に満足してもらえる授業が本当に「良い授業」かどうかということに大きな疑問を抱いている。

人間学部 人間学科

commentator 学部長：伊藤 俊一

人間学部人間学科は2003年度開設のため、1～3年生を調査対象としているが、1年生は30%強にあたる76名しか調査できなかったため、この点に留意しつつ調査結果を検討した。

「この学部学科へ入学してよかった」と感じている学生の割合は60%弱となっている。授業科目評価において「将来、実際に仕事をするときに役立つと思う授業」が少ないと感じている学生が75%を超えている点と合わせて考えると、本学科が育成しようとする実践的教養人の姿を学生が明快にはイメージできず、そのために今、受けている教育の意義を理解しにくいものと思われる。本学科は特定の職業分野で活躍する力ではなく、高度に発展したわが国のさまざまな職業分野で活躍し、社会に貢献する土台となる力を育成しつつある。しかし、学生の側は仕事の実際を狭く浅くとらえている様子がうかがわれ、授業の改善とともに、学生のキャリア開発に力を注ぐ必要があると感じる。

「大学に入って人間的に成長した」と回答した学生の割合が75%を超えている点からは、教育の手ごたえを実感できる。授業科目評価においても、「学生の努力を認めた上での適切な成績評価を行う授業」「学生に興味がわくよう工夫した進め方の授業」にまずまずの評価を受けていることから、教育の成果が裏づけられよう。授業科目の印象評価において、「内容が魅力的な科目」「学習内容が面白い科目」が多く、「単位が簡単に取れてしまう科目」が少ない、との結果からも、授業の内容や方法について、学生がおおむね満足しているように見受けられる。

その一方で、「勉強意欲があると自負できる」学生の割合は30%にとどまり、「授業期間の1週間の勉強時間」も2時間に満たない学生の割合が60%を超えている。卒業して社会に力強く踏み出す学生を育てるには、さらに授業を中心とする学生の指導に知恵を絞る必要があると感じる。

名城大学FD委員会広報誌 Vol.6

Meijo FD NEWS

発行日 平成19年3月9日

発行者 名城大学 大学教育開発センター

〒468-8502 名古屋市天白区塩釜1-501 TEL. (052) 838-2033 (ダイヤルイン)

ホームページ <http://www.meijo-u.ac.jp/> Eメール edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp

編集協力 (株)進研アド 中部支社



この印刷物は、古紙配合率100%再生紙と環境にやさしい*植物性大豆インキを使用しております。